

第5回『呼吸と循環』賞—受賞論文発表

古瀬領人論文(呼吸器領域)と石井俊輔論文(循環器領域)が受賞

『呼吸と循環』誌では1年間に掲載された論文を対象に、『呼吸と循環』賞(Respiration and Circulation Award)を設置しております。本賞は当該年度の『呼吸と循環』誌(1~12号)に掲載された投稿論文(綜説は除く)の中からオリジナリティのある論文を選考対象とし、原則として呼吸器領域1編、循環器領域1編に賞状と副賞10万円を授与致します。第5回となる今回、2012年(60巻)に掲載された投稿論文が対象となり編集委員による厳正な審査のもと2編の受賞が決まりました。以下に、受賞論文と受賞者、評価対象となった論文の授賞理由を発表します。

【論文名】「乳房温存療法に伴う放射線治療後に発症した器質化肺炎の2例」(症例論文)

【著者名】古瀬領人, 黄 英文, 浅田佑介, 須藤晃彦, 高橋秀徳, 上石修史, 千代谷厚, 木村吉成, 田島敦志, 古川潤二, 木村徳宏(済生会宇都宮病院呼吸器内科, 他)

【掲載号】60巻12号:1295-1299頁

【授賞理由】「放射線治療による副作用として放射線肺臓炎の発症に注意する」ことは、国家試験に合格した医学生であれば常識である。呼吸器内科臨床の現場では、放射線治療後3カ月間は、放射線肺臓炎(急性障害と一般に呼ばれている)の発症に注意している。しかし、それ以降に生じる晚期障害は、ともすれば忘れられがちである。「放射線照射範囲外の浸潤影」を診たときには、細菌性肺炎など、放射線治療と関係のない病態がまず考慮される。乳がん治療ではホルモン療法が施行されている場合がほとんどであり、ホルモン療法が「薬剤性肺障害」ないしは「器質化肺炎の発症ないしは悪化」に関与している可能性は常に考慮しておく必要がある。また、治療としてステロイド療法は有用であるが、適切な投与期間は必ずしも明らかになっていない。「乳がんに対する放射線



●古瀬領人氏



●石井俊輔氏

治療後の器質化肺炎」は、各施設で数例は経験されている可能性があるが、それに対する改めの警鐘という点で有意義な論文と評価する。

【論文名】「拡張障害の進行により心不全悪化を来した慢性心筋炎の1剖検例」(症例論文)

【著者名】石井俊輔, 猪又孝元, 渡辺一郎, 品川弥人, 小坂橋俊美, 西井基継, 竹内一郎, 青山直善, 仲田典広, 三上哲夫, 和泉 徹(北里大学医学部循環器内科学, 他)

【掲載号】60巻6号:657-662頁

【授賞理由】慢性心筋炎は、拡張型心筋症と診断された症例の中に少なからず紛れ込んでいる。これは本症の診断が極めて困難であることに起因し、予後、臨床像、管理法などは必ずしも明らかではない。石井らの論文は、約16年にわたり拡張型心筋症とされてきた症例を剖検した結果、慢性心筋炎と診断された症例を報告した。同時にこの症例が拡張機能障害の病態をとってきたことを示し、本疾患による心不全が収縮不全のみならず、拡張不全を主体とするものも存在することを明らかとした。本論文は症例報告ではあるが、慢性心筋炎と確定診断を受けた症例で長期間の詳細な解析がなされており、本症の病態解明に重要な役割を果たしたと考えられ、『呼吸と循環』賞に相応しい研究であると評価された。